

Be 動詞句省略のラベリング分析

末永 広大

1. はじめに

以下に示すように、一般動詞句の省略(Verb Phrase Ellipsis: VPE)とは異なり、コピュラ *be* 動詞句の省略(Copular Phrase Ellipsis: CoPE)では、*be* 動詞の省略が随意的である。

- (1) a. John will be there, and Mary will (be), too.
b. John will go there, and Mary will (*go), too.

本論では、Chomsky (2013, 2015)におけるラベル理論の観点から、CoPE における *be* 動詞省略の随意性を探求する。もっと言えば、コピュラ *be* 動詞句の派生では“Reverse” pair-Merge が行われると主張する。

2. Deletion by Phase (Takaki (2017))

本節では、ラベル理論の観点から省略現象を説明する Takaki (2017)の提案を概観する。Takaki は、フェイズによって削除領域が指定されると主張している。具体的には、フェイズ主要部が E 素性 (Merchant (2001))を持って派生に導入され、当該素性を持つラベルが省略箇所としてマークされる。以下で VPE の派生を概観する。

- (2) a. John likes cars, but Mary doesn't.

b. $\{\gamma v^*_{[E]} \{\beta \text{ cars } \{\alpha R, \text{ears}\}\}\}$

c. $\{\gamma v^* \{\beta \text{ cars } \{\alpha R_{[E]}, \text{ears}\}\}\}$

d. $\{\gamma R_{[E]-v^*} \{\beta \text{ cars } \{\alpha R_{[E]}, \text{ears}\}\}\}$

($\alpha=R, \beta=<\varphi, \varphi>, \gamma=R_{[E]-v^*}$)

(2b)はフェイズ主要部 v^* が派生に導入された段階を示している。次に、(2c)に示すように、 v^* が持つ[E]素性が R に継承される。その後、(2d)にあるように、Internal pair-Merge によって $R_{[E]-v^*}$ amalgam が形成される。当該の主要部は集合 $\{R \{R, v^*\}\}$ と見なすことが出来るため、[E]素性を持つラベル $\gamma(R_{[E]-v^*})$ が削除領域として指定されることで、(2)のような VPE が生じることになる。つまり、省略はフェイズによって駆動される。

3. 提案

本論では、非対格構文においてもフェイズ主要部 v^* が派生に導入されるという Hayashi (2020)の想定に従いつつ、以下に示すように、非対格動詞の一種であるコピュラ *be* 動詞句の派生では“Reverse” pair-Merge が行われると提案する。

- (3) a. Mary is there.

b. $\{\beta R \{\alpha \text{ Mary, there}\}\}$

c. $\{\gamma v^*_{[u\varphi]} \{\beta R \{\alpha \text{ Mary, there}\}\}\}$

d. $\{\delta \text{ Mary } \{\gamma v^*_{[u\varphi]} \{\beta R \{\alpha \text{ Mary, there}\}\}\}\}$

e. $\{\delta \text{ Mary } \{\gamma v^* \{\beta R_{[u\varphi]} \{\alpha \text{ Mary, there}\}\}\}\}$

f. $\{\delta \text{ Mary } \{\gamma v^*-R_{[u\varphi]} \{\beta R_{[u\varphi]} \{\alpha \text{ Mary, there}\}\}\}\}$

(3b)は、集合 α に R が併合された段階を示している。次に、(3c)のように、フェイズ主要部である v^* が派生に導入され、(3d)のように、*Mary* が γ に内併合する。そして、(3e-f)に示すように、R が[u φ]を継承し、“Reverse” pair-Merge が適用されることで v^*-R amalgam が形成され、R が持つ[u φ]が統語的に非可視化される。

上記のような新たな併合方法を提案する根拠は以下のとおりである。(現代標準)英語では、副詞や否定辞との位置関係から、一般動詞とは異なり、コピュラ *be* 動詞は V-to-T raising の対象となり得る。本論に従うと、thematic R を主要部とする R- v^* ($\{R \{R, v^*\}\}$)を形成する一般動詞の場合と違って、コピュラ *be* 動詞句の派生では light verb である v^* を主要部とする v^*-R ($\{v^* \{v^*, R\}\}$)が形成される。英語では、意味内容を持たない (verbal) Head のみを T が引き付けることが出来る想定すると、意味内容を持たない v^* を主要部とする v^*-R amalgam Head と見なされるコピュラ *be* 動詞は、T 位置へ移動可能となることが予測される。

また Chomsky (2015)では、 v^* は verbal categorizer であると想定されており、*befriend* (be + N: friend)や *belittle* (be + A: little)などの動詞から見て取れるように、*be* 動詞も verbal categorizer としての性質を有している。さらに、上記のような動詞形成を鑑みると、verbal categorizer である *be* が他の要素に後節するような併合方法を想定することは非合理的ではないと考えられ、light verb かつ verbal categorizer としての性質を持つ v^* を主要部とする v^*-R amalgam Head が形成されるという想定は、省略現象を含め、コピュラ *be* 動詞に見られる特異性の解明に繋がる可能性を秘めていると言えるだろう。

4. CoPE における随意性

本節では、上記の提案を下に、CoPE における *be* 動詞省略の随意性を考察していく。まず初めに、*be* 動詞が削除領域に含まれない場合の派生を以下に提示する。

- (4) a. John will be there, and Mary will **be**, too. (=1a)
 b. $\{\gamma v^*_{[E]} \{\beta R \{\alpha \text{Mary, there}\}\}\}$
 c. $\{\delta \text{Mary} \{\gamma v^*_{[E]} \{\beta R \{\alpha \text{Mary, there}\}\}\}\}$
 d. $\{\delta \text{Mary} \{\gamma v^* \{\beta R_{[E]} \{\alpha \text{Mary, there}\}\}\}\}$
 e. $\{\delta \text{Mary} \{\gamma v^* \text{-}R_{[E]} \{\beta R_{[E]} \{\alpha \text{Mary, there}\}\}\}\}$ ($\beta=R_{[E]}$)

上記の派生で重要となるのは、(4d-e)に示すように、 v^* から[E]を継承した R に“Reverse” pair-Merge が適用されることで $v^* \text{-}R_{[E]}$ が形成され、R が持つ[E]は統語的に非可視化されるため、 γ への省略がキャンセルされる、ということである。一方、 β のラベルとなる R が持つ[E]は、Minimal Search によって既に探査されているため、 β 以下(*be* 動詞の補部)が削除領域としてマークされる。よって、*be* 動詞は削除領域に含まれないことになる。

次に、*be* 動詞が削除領域に含まれる場合の派生を以下に提示する。

- (5) a. John will be there, and Mary will, too. (=1a)
 b. $\{\delta \text{Mary} \{\gamma v^*_{[E]} \{\beta R \{\alpha \text{Mary, there}\}\}\}\}$
 c. $\{\delta \text{Mary} \{\gamma v^*_{[E]} \text{-}R \{\beta R \{\alpha \text{Mary, there}\}\}\}\}$ ($\gamma=v^*_{[E]} \text{-}R$)

上記の派生で重要となるのは、(5b-c)に示すように、 v^* に[E]素性が保持される、ということである。Takaki (2017) 及び Hayashi (2020)に従うと、素性継承は随意的に行われるため、この場合では“Reverse” pair-Merge によって形成される $v^*_{[E]} \text{-}R$ ラベルが削除領域としてマークされるため、*be* 動詞は削除領域に含まれることになる。

5. Finite CoPE

以下に示すように、定形節においては *be* 動詞句の省略に随意性は見られない。

- (6) John is there, and Mary (*is), too.

既に議論したように、 $v^* \text{-}R$ と見なされるコピュラ *be* 動詞は、T 位置へ移動可能であるため、以下に示すように、定形節の *be* 動詞句にも省略が適用可能であることを誤って予測する可能性が生じる。

- (7) ... and $\{\text{Mary} \{\alpha v^*_{[E]} \text{-}R \text{-}T \{\dots v^*_{[E]} \text{-}R \dots \text{there}\}\}\}$

しかし、R-to-V raising と同様に、V-to-T raising が (CP フェイズにおいて) Minimal Search の後に適用されると想定すると、当該の pair-Merge は T のラベルが探査された後に適用されることになるため、*be* 動詞は省略領域に含まれないことになる ([E]を持つラベルが削除領域となることに留意： $\alpha=T, \alpha \neq v^*_{[E]} \text{-}R$)。

一方で、以下のような空所化の場合では、定形の *be* 動詞の省略が可能である (e.g., Sag (1976: 271) 他)。

- (8) Carol was happy with her Oldsmobile, and Margie ~~was~~ upset with her Porsche.

上記のような場合では、フェイズ主要部である C が持つ[E]素性によって省略が駆動されると予測される。

- (9) $\{c C \{<_{\phi, \phi}> \text{Margie} \{T_{[E]} v^* \text{-}R \text{-}T_{[E]} \{v^* \text{-}R \dots v^* \text{-}R \{AP \text{upset} \dots\}\}\}\}\}$

(9)に示すように、この場合では T が[E]を継承することで T のラベルが削除領域としてマークされる。また、省略は厳密的にフェイズ単位で適用され、フェイズを超える(侵害する)ような省略適用が不可能であると仮定すると、上位 CP フェイズにおける省略操作は下位 v^*P フェイズに干渉しないことが予測され、 $T_{[E]}$ ラベルが削除領域としてマークされることで、(8)のような定形 *be* 動詞の空所化の省略派生が得られることになる。

6. 結語

本論では、コピュラ *be* 動詞句の派生では“Reverse” pair-Merge が行われると提案することで、CoPE に見られる *be* 動詞省略の随意性を説明した。さらに、本論の想定は、ラベル理論の下、定形節における CoPE や *be* 動詞の空所化へと拡張可能であることを示した。本論の想定をより頑強なものにするためには、他の関連する構文への拡張など、更なる調査が必要だが、その詳細な議論については紙幅の関係上割愛する。

[主要参考文献]

- Chomsky, Noam (2015) “Problems of Projection: Extensions,” *Structures, Strategies and Beyond: Studies in Honour of Adriana Belletti*, ed. by Elisa Di Domenico, Cornelia Hamann and Simon Matteini, 3-16, John Benjamins, Amsterdam.
 Hayashi, Norimasa (2020) “Labeling without Weak Heads,” *Syntax* 23, 275-294.
 Takaki, Rumi (2017) “A Unified Account of Elliptical Constructions in Terms of Labeling Theory,” *English Linguistics* 33, 445-477.